

監獄長は愚痴りたいよ
うです。

カワサギ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

王都の地下にある大監獄

そこにて鬼畜の王と謳われる監獄長の元日本人サナダは

ストレスが溜まる日常を繰り返していた

ある日、無邪気な王女（かわいい）の隠し事により

トラブルに巻き込まれ、ため息どころの話じゃ無くなる日常にまきこまれようとしたのであった!!

目次

地下の長の日常

1

仕事が始まる前に仕事

10

地下の長の日常

王城のある一室、この王都において、最高クラスの権力者が集まり、話し合いが行われている。

話す内容？それは……

「それではこれより、冒険者サトウカズマをどうするか

決めようではないか」

冒険者^{ニト}を処分する話し合いさ

「あの冒険者がアイリス様に何か吹き込んだに違いない。アイツがアイリス様に会ってから、アイリス様は随分と行儀の悪いことをするようになってしまった、しかもアイツとは時々遊びに来るなどという約束まで結んでしまっている、奴は魔王軍の手先だそうに違いない。そうでなければいつものようにヴェレンツォ伯父様と違ってくれる。必ず……」

「ほっほっほ何をいいますかな アイリス様はこのバーデンにとても懐いていらつしやる 貴様のような脳筋ごときにアイリス様は伯父様などつけんわい 社交辞令じゃよ、社交辞令」

「ハツ年寄りが抜かしやがって アイリス様はこのアベルを大変！大変！たーいへんに！気に入っていらつしやる しかしこんな美青年と仲良くしてしまつたら、この人が不幸な目にあつてしまうかもしれない！そう思つて嫌々！俺の為に！老害共に愛想を振りまいてるというのがまだ！わからんか！」

揃いも揃つてこの世界にはろくな貴族がない

それは、俺がこの世界に來た時からずつと思つてきたことだ

いまでも、王女様が気に入っているのかは誰かという議論に

方向転換しようとしている始末である

俺はそのサトウカズマという人物にあつたはないが、

それはそれは鬼畜だの外道だの言われている

奴だそうだ 今まで犯したコソドロの様な罪の数は星の数にも及ぶという

名前からしてこのカズマという冒険者も本当に女神なのかよくわからない自称女神に連れてこられたニートだろう

あの女神はニートしか連れてこないのか、自分で思つて

自分で突っ込む、この世界に来てから六年程経ったせいか

こういうよくわからないことを心の中で行うようになってしまった

理由は単純明快

「話を戻しましょう。サト……」

「話を戻すだ?!?あの愛くるしいアイリス様についての話より優先度の高い話があるわけないだろうが!身の程を弁えろ!地下監獄獄長如きが!」

こっぴどく怒られるからだ

いやはやなんという権力の乱用、日本でも早々ありえない

上司の無茶振りのようだ

というかこいつら気持ち悪すぎるだろ、口が悪いが相手はまだ未成熟の子供、大人が
どういう生き物なのかは愚か、子供はコウノトリが運んできてくれるとさえ思っている
歳である

そんな子供に39、57、25の大人が大熱狂して語り合うのは

どうかと思う

こんな日常が五年間続けば、目の光も失われて、相手を射るような目にもなる

通りがかりの他貴族達はシュツとしてるだの切れ目で素敵だのと言ってくるが全く
嬉しくない

この整った顔立ちは、ストレス故に、モンスター共を殺し回っているからなったもので、元は高校生という感じの顔だった

周りには友人という友人はいないので愚痴ることすらできない

加えて服を着崩したり、法を犯すのを許せない性分のためか相談役や代表などに駆り出される羽目になる

癒しといえば、無邪気な王女様と遊ぶことと、元は冒険者だった俺を拾ってくれた貴族の家に行くことである

その僅かな癒しのために、わざわざ本来の目的を忘れる会議にずっと出席している
「あの……その……」

申し訳ないような表情で王女様の側近である人物がこちらに話しかけてくる

笑顔で返したいところだが俺の顔はもう笑顔を作ることを許してくれないのだろう
「お気にならさず、いつものことですから」

無愛想の表情のまま答える

当然側近はすいません……と言いながら正面に向き直す

いや本当にすいませんね昔に戻りたいぐらいですよ本当

本来の目的であるサトウカズマ殺害計画（適当）はどこかへ

走り去って行き、サトウカズマの命は救われ
俺の精神が死んだ

「サナダ……すいません今はゼスト・バーナード・ハルトマン監獄長でした……」
「どちらでも構わない。君たちの好きに呼べ、と毎回言っているだろう」

——王都地下大監獄舎監室

監獄でも牢獄でも呼称が違うだけなのでこのどちらかで呼ばれているが、
ある時、この大監獄の長、彼がいるときだけは呼び名が変わる

——魔王軍幹部曰く、死の大獄

——貴族・王族曰く、常闇の魔境

——冒険者曰く、煉獄庭園と——

今日だけで監獄こくに送られてきた冒険者は三人か、
貴族といい、冒険者といい本当に罪深い連中ばかりだ

自分こそ正義など思ったことはないがこの仕事が続けば、そう思いたくなるのかもしれんな

今一度、自分を戒め、罪人を裁かなければ……な……

「サナダ様、どうかお目通りを……」

と、俺のもとに来客のようだ

この男は……王家に仕えている執事か、名前は確かヘンゼルのはずだ

俺は丁重に挨拶をした

「王家に仕える位高き執事殿がわざわざ舎監室まで赴き、汚らわしきこの監獄長如きに

どのような入用で？」

自分の中ではかなり下にさげ、相手を棚に上げた発言をしたが

彼にはそう聞こえなかったらしい

「いや……そのようなこと……けっして……あ、ありません……」

「すまない、もう一度手間を割き、同じことを言ってはくれないだろうか。

私の耳では、よく聞こえなかった」

執事は汗をかきながら小声で何度も謝ってくる

いつもこうだ、俺は嫌われているのだろうか……

現に先程、執事控え室で誰が俺を呼びに行くかを決めるジャンケンをしていたのを見てしまった。

一体なにが原因なの——「キヤー鬼畜で素敵だわ！」そこ、煩いぞ

「もしや、アイリス様がお呼びに？」

「は、ハイ！そのとおりでございます！」

正直、日陰者の俺を温かく迎えてくれる人は多くはない

先の貴族連中どころか同じ職場の仲間でさえ、俺に冷たい

そんな俺がよくもこんな仕事についたなと思うのがこの頃

まあ、全て拾ってくれた家が提供してくれたようなものだが

この国の王女様は御伽噺に出てくるような人で助かった

貴族の推薦があるとはいえ、全く知らない冒険者、しかも高レベルではないというのに、温かいベッド、風呂、食事を提供してくれる、そんな人柄だからこそ、あの貴族連中が騒ぎ立てるのもわかる

だがそれとこれとは話が別だ、あんなダメ人間ばっか見ているはアイリス様の教育に良くない、サトウカズマをゴキブリに例えるなら、あいつらは村娘にたかる豚

早々に消し飛ばしたい所

アイリス様の呼び出し内容次第ではあいつらを潰せるやもしれん

いや、無理な話か、アイリス様がそんなことをいうとは

思えんし、あの人は優しいからな

そうこうしている間に王座に続く重い扉の前に到着する

いやはや何度きても緊張するものだな本当に

アイリス様はどんな機嫌だろうか、俺が来たことで

気を悪くしないだろうか、そういう狂気めいた感情が

込み上げてくるのは自分でも気持ちが悪い

ストレスをアイリス様で発散していると云えるだろう

ひとつ言っておくが、俺はロリコンではない鬼畜でもない

扉を開けると、すぐ目の前に歓喜の表情をした

少女が一人

高校時代だったら死んでいた、危ない危ない

「およびでしようか？アイリス様」

「今日はずね……貴方にだけ話しておきたいことがあります……」
隠し事とな？ また無邪気で可愛らしい子供ならはだな

どんなことだろうか、料理をサトウカズマと一緒につまみ食いしたことだろうか、それとも宝物の一部をくすねて遊んだことだろうか、この俺に相談事とは本当に嬉しい限りです、アイリス様……

「隠し事とは？」

アイリス様はしやがめと手で合図する

身長差があるからな、しやがまないと周りに聞こえてしまうか

俺はその場にしやがみアイリス様の隠し事に耳を傾ける

耳に当たる吐息がややいやらしい

誤解を生みそうだがロリコンではない

「仮面の人に……いえ……お兄ちゃんに指輪を取られてしまいました……」
俺はその場で床に頭を叩きつけるはめになった

仕事が始まる前に仕事

ため息をつき、鈍い痛みを発する頭を眼前のアイリス様に向け……

「アイリス様、すぐにサトウカズマを処分しましょう、大丈夫、責任はお……」

「だツ…駄目です！じゃなくておねがいがあつて……」

「いえ駄目です!!!ただでさえ老害共がアイリス様に近づこうとしてるなかで!

そんな危険を絵に描いたような人物とかかわつては……」

「頼めるのは貴方しか……」

涙目に上目づかいにお願いは最強だよなあ……

俺も年をとつたな、幼女に弱くなるたあね

誤解を生みそうなのでいっておくがロリコンではない

サトウカズマが指輪を盗んだ犯人ということを墓まで持つて帰る

この事実を知った人間は抹殺すると(※いわれてません)

探そうとするやつは何とかする……か……

確かにこれは最高に難しい、国王は血眼になって犯人を捜している

次期にキチガイの集まりと言える監獄管理員にも声がかかるだろう……

こいつらが大问题、キチガイだが腕は立つ、王国の精鋭たち

国王すら敬遠する奴らだが、アイリス様の件となれば重い腰をあげるだろう

このキチガイども、もとい、義妹共に

に活動をおこさせない、特にアイズにはな

アイツの目は悪魔すら恐れる見通す目、そんなものを使われたら即バレ死刑

こればかりはアイリス様の力ではどうにもならんし俺も加担したとして

死刑なんてまっぴら御免被る

しかしこちらの心も未来も視られる以上、普通にお願ひしても意味がない

どうしたものか……

考えながら歩いているうちに反対側からアンダーリムの眼鏡をかけた、ガタイのいい

執事が俺のほうに向きながら走り、唐突な自己紹介をする

「失礼いたします！監獄長ゼスト様！ワタクシ王家直属執事、ロハンと申します!!!」

挨拶のような自己紹介にこちらも挨拶して返すと、せっかちなのか用件を喋り始める

聞けば俺が居候しているハルトマン家に俺宛の手紙が隣国、シャムザードから届いた

らしい

重要度が高いとのことなのでどういう風の吹き回しか、王家直属執事のロハンが俺に急いで渡しに来たと言う

「義父様はなんと?」

手紙を届けることを依頼したのであろうバーナード家の主のことを聞くと

ロハンはノンつとのどを鳴らし姿勢を再びなおしながら答える

「『ゼストも人の子、フィールも同じく人の子、彼らの道は彼らが決める。』

だが、しかし、孫の顔はみてみたいのう」と、申しておりました!」

孫の顔……だと……!?!いやな予感が脳裏をよぎり、冷や汗が頬をつたっていく

いや、いつかあるかもしれないとは思っていたが、それが俺とはかんがえもしなかった

ロハンは澄んだ瞳でこちらの気も知らず「如何!!!お返事いたしましょうか!!!」などと

催促してくる

悪気はないのだろう、しかし空気はよんでくれ、じやなきやそうだな……

一発ぶん殴らせてくれ、頼む最後のお願いだから

と、心の中で思いつつ、いつものように真顔で答える

「……フィールを応接間に呼んで、ロギンスを舎監室に連れて来い、義父様には善処し

ます

と伝えておけ」

「かしこまりましたゼスト様、いいえ、サナダレンミ様」
なぜ言い直したのかということと、言葉のの頭に力を強める言い方をやめてくれないか

なんていう話をしたが韋駄天のごとき速さで逃げられる

なぜだろう初対面のはずなのにすぐ見知った仲のような気がする執事だった

あとで一発殴ろう

そう心に思いを秘めつつ、大問題であろう手紙を開く

『(中略) つきましては、フィール・ハルトマン様、ゼスト・バーナード・ハルトマン様両名に我が息子と娘とともに開く小さな茶会への招待を——』

淡々と目を通していき、『進展次第では』という一文を目にした瞬間、そつと手紙を閉じた

そつとところろの中で、クソめんどくさいことになったとぼやきながら、地下の舎監室へ向かった

「なんで俺が、よばれたんですかねえ」

ツンツンした長めの髪を後ろで止め、私服ともいえる執事服をきた

我が愛おしき義弟、ロギンス・ハルトマンはそれはそれは不服そうな顔でまっていた
ほんとだよな、なんで俺もお前を呼んだのかわかんねえよ

「義兄さん、そんなに急ぐ用なの？家にいるときみたいな変わった服じゃなくて、

王国指定の監獄長服に帽子までつけたまんまなんてさ」

そういわれれば勤務時間は終わっているのに着替えずにロギンスを呼んでしまった
な

最初はこの中二臭い赤と、黒を基調とした服を嫌がったものだが慣れると何とも思わ
ないものだな

それはそうと、俺の今後を左右するこの事案を早急に対処するための相談をしなけれ
ば……

まあ、言えることは一つで……

「面倒なことになった」

手紙の内容を説明すると、ロギンスの顔がさらに険しくなった
そりや家にとって一番の問題で一番の頼りともいえるこの俺に

「お見合い……デスカ……」

デスカの発音がおかしくなるほどショックを感じているのだろうか、

コイツ死んでくれないかな。とても思っているのだろうか、恐らく後者だが後者だったらあとで燃やし尽くしてやろう

「俺としてはなあなあで済ませたいが、が！」

「義兄さんだけじゃなくて、あのフィールか……」

そう、あのフィールなのだ……今までにきた見合い話をすべて断り、その見合い相手の大半を

泣かした慈悲なき令嬢、あいつのせいで一体どれだけの男が見合いを考え直したのか……

今回の相手は一言で表すと『気弱なデブ』。フィールは張り合いのない男は嫌いだし、そもそもデブは嫌いだし、貴族が嫌いというこいつどう結婚するんだよレベルの

銀髪ロングのゴシック服に触り心地のいい肌をしたなんやかんやでデレてくれるかわいいやつ

何だよなあ……

「キモッ。」

こちらの心を見透かされたようだが、いつもの真顔を貫き通し、フィールが待っている、行こうと、ロギンスを舎監室から連れ出す後ろでずっとうわあ、だのないわーだのと言ってくるが気にしない

なぜかって？なあに、今にわかるよ

ちなみに、フィールはゴシックファッションの服を着ているだけで
ゴスロリではない、ちゃんとした美人であって、ロリータではない

「俺だ」

「名を」

ドアをノックし、いつものように声をかけるが

辛辣に返されてしまった、笑っているロギンスの右小指に一瞬火をつけて、黙らし
名を名乗るとどうぞと許可をもらった

「いつものように見合い話ですか？何度も言いますが私の理想の男性は……」

「なあ、姉さん、そろそろさ、父さんを安心させるために譲歩しても……」

「バツカお前、今横から入り込んだら……」

「私が話してるのはゼスト様であって貴方ではないわロギンス、

気が短いと象徴も小さくなるのね、そんなんだからアリアを満足させられないのよ、

毎回毎回、『ゼスト様やアイズ様のような方と一緒になりたかったわ……お二方とも

さぞや

大きなものをお持ちなのでしよう……』なんて蕩けた顔で——」

「わあー!!!わー!!!」

相変わらずエグイ攻撃だ……ロギンスが一番気にしていることを指摘しただけでなく、嫁が愚痴つてた話までですとは……

軽く引いてるとフィールがこちらに向き直る、

目の前で苛烈なやりとりがあつたために言葉を失つていたが

受けたくもないお見合いに毎行つてくれるフィールをおもつて

「その……なんだ……なんだかんだで家のこと考えてくれるお前だしさ、

お礼とか何でもするから……な？」

「お礼ですか……」

お礼という言葉にぐらついたか、不機嫌だった表情を改めてくれた

これは落着かなと思つたが

「では、家族みんなでお風呂に入りましょう！」

ゼスト様は髪を洗うのがお上手ですし、アイズお義兄様はお背中を流すのがお上手なので、

きつとアリア達も……」

「やめておけ」

こいつなんて突拍子のないこと言いやがる……

異性同士で風呂はいる提案だけでなく、ロギンスにとどめまで……

確かに数回、魔王軍だの身内のせいでこいつと一緒に風呂に入ったことがあるが、そういうのなしでいいだすとはね……

「ゼスト様の下心を理解したつもりだったのですが……」

余計なお世話だっつーに

「話をついたな、支度しろ、長支度ぐらいは待つ」

釣れないですね、といった顔でフィールは支度をするために、更衣室に向かう。何を言おうと荷物は持ってきている、出来た義妹だ。

フィールの負担が少しでも減るようにと思つてと

「なんかあったらいつでも俺を頼れよ、俺はお前の兄だからな」

声をかけたが、

「人を殺した異形の義兄……ですけれどね……」

暗い顔でそのまま応接室をでていく

反論する言葉も特になく、感触のいいソファアに座る

「アイツ……」

いつの間にか復活していたロギンスを黙って座らせ、フィールが用意してくれたであ

ろう

紅茶に口をつける

「フィールの態度は当然だ、お前が怒ることじゃない」

「感触がいいはずのソファアは心地悪く、いつも甘めな紅茶は、少し苦く感じた

「ねえ、聞いてラクワ、またお義兄様おにいさまに冷たくしてしまったわ」

メイドとフィールのたった二人だけの更衣室で髪を梳かしてくれているメイドに

悲しげにぼやく

「兄、そうお義兄様が言っただけで反応してしまうこと、どうにかならないかしら？
怖くなって足早に出てしまったけれど……」

「大丈夫です、ゼスト様はいつでも赦してくれます、フィール様が

素直になれば、自分の心に素直になれば、ゼスト様はよくいったと、抱きしめてくれます」

悲しげな表情を、無理やり笑みに変えて

「そう、素直になれば……赦してくれるわよね……」

更衣室にはかつて黒かった銀髪を梳かす、小さな音だけが残った

